

2013.04.10

「サッチャー元英国首相から学ぶべきもの」

こんにちは、参議院議員の西田昌司です。4月9日火曜日です。

今日は私の地元である京都の和束町長選挙の出陣式に出席して参りました。明日からまた東京に戻ります。今日、イギリスのサッチャー元首相がお亡くなりになったというニュースが報道されました。サッチャー元首相で思い出されるのは、私が学生だった頃に「鉄の女(Iron Lady)」と呼ばれ、保守主義を掲げて政治を進められてきました。当時は「ゆりかごから墓場まで」という形で、イギリスは福祉大国となり、様々な企業を国有化し、社会の安定が進められました。

しかし、このようなことが原因でイギリスは国際的な競争力を失っていきます。「イギリス病」という形で長い停滞に入ったと言われていた時代に、もう一度自助努力で国力を取り戻していく、「働かざる者食うべからず」というような強い口調でイギリスの改革を行ってきました。また、労働党時代の様々な福祉政策や「大きな政府」ではなく「小さな政府」を目指すもので、「サッチャーリズム」という名義でこうした政策が推し進められました。

「サッチャーリズム」と呼ばれた改革は、東西冷戦(1945～1989)の真っ直中に、もう一度イギリスが国力を取り戻すためのものとしてだけでなく、東側諸国の共産主義に代表されるような計画経済や様々な規制を悪とし、これに対

抗して、規制緩和や「小さな政府」を実行するためのものです。現在も改革派の目指す代表的な政策となっているこの改革は、冷戦時代にサッチャー元首相の下、行われました。このような政策は今からちょうど 30 年前に行われたもののなのですが、この「サッチャーリズム」は、当時は東西冷戦という大きなイデオロギー対立の中でのものでありました。「サッチャーリズム」が出現した背景には、「イデオロギーとしての対立」があったということです。そして現在はイデオロギーではなく、「現実の経済や社会」に対して「サッチャーリズム」はどういう意味があったのかを考えるべきです。もちろん共産主義のような雁字搦めの規制のもとで、計画経済を行っていても社会は発展しません。しかし、イデオロギー体質に基づく「規制の無い自由主義が良いのだ。」という一方的かつ楽観的な自由主義信奉でも通用し無くなってきました。東西冷戦の真只中であったサッチャー元首相の時代には、自由主義にもう一度復権を与える事は非常に大きな意味があったと思います。しかし、現在と戦時中では状況が異なります。

私はサッチャー元首相に対して非常に評価をしています、「規制緩和を行い、小さな政府の実現を。」というようなサッチャーリズムを蘇らせようとする気ではありません。この 30 年間で時代は大きく変化しました。元々、イギリスで産業革命が始まり、世界の工場となって世界経済を引っ張ってきました。しかし、第二次世界大戦後はアメリカが主導権をイギリスから奪い取り、アメ

リカが世界の工場となり、世界のお金の大半がアメリカに集中する時代になった中で、イギリスは国力を失っていきました。しかし、もう一方では、イギリスが国力を持っていた時代に様々な福祉政策を進めたり、国内のインフラ整備も進めてきたりしたことは大いに評価すべきです。つまり、時代によって政府がやるべき仕事や政策は変わり、ただ一つのイデオロギーに固執することなく、日々変化する状況を伺いながら政策を縦横無尽に駆使していくことが大切だということです。そういう意味で、産業政策よりも福祉を重視してきた時代から、もう一度社会全体の経済や活力を取り戻したというサッチャー元首相の貢献は実に大きなものでした。

「アベノミクス」というのはサッチャー元首相と共に、東西冷戦の時代に大統領として活躍したアメリカ合衆国のレーガン元大統領の「レーガノミクス」から来ている経済政策を指しています。これも私は何度か申し上げてきましたが、色々な政策がミックスされています。TPO(時と場所、場合)に応じて、今デフレの状況が進んできている時代ですから、黒田東彦日銀総裁が行う「異次元の金融緩和」も必要であり、同時に財政出動やイノベーションも必要です。それぞれの学説が違っても、必要な政策を必要な時期に行うということです。しかし、当然の事ながら副作用もありますので、イデオロギー、政策や学説に縛られることなく、行き過ぎた所は戻していく、不足している所には追加していくような縦横無尽な発想が必要だと思います。私がサッチャー元首相の訃報

を聞きまして、サッチャー元首相の政策から学ぶべき事はたくさんありますが、一番大事なことは、臨機応変に経済政策を活用していくことをこれから安倍内閣総理大臣も見習って頂きたいという感想を持ちました。

本日も御覧頂きありがとうございました。